

子どもの本だな 58

このページは子どもたちにすすめたい本をとりあげています。本を選ぶときの参考にしてください。

すばらしいとき

ロバート・マックロスキー ぶん・え  
わたなべ しげお やく (福音館書店)

ベノブスコット湾に浮かぶ小島に、2人の姉妹が両親と滞在しています。早春の霧の朝、小島の渚に立つと、何も無い世界にひとりぼっちでいるように感じます。しかし、霧が晴れるころには、鳥の歌声が聞こえ、気づくと一緒に歌っています。夏の盛りは、海にヨットが浮かび、岬では子どもたちが遊んでいます。夜にはボートを漕ぎだし、その上では一面の星空が輝いています。時には風が強くなり、島に嵐が訪れます。木の枝を吹き飛ばす程の突風が吹き荒れ、激しい雨が海原をたたきつけます。しかし次第に風はおさまり、翌日にはやさしい朝が訪れます。

春の初め頃から、夏の終わりにかけて、自然豊かな小島を舞台にした絵本です。姉妹が感じた、自然の美しさ、楽しさ、恐ろしさが、詩的な文章と色鮮やかな絵で表現されています。読み終わると、自然の中で過ごしたくなるようなお話です。

8~9歳くらいから。 (光藤)

農場の少年

ローラ・インガルス・ワイルダー 作

ガス・ウィリアムズ 画 恩地 三保子 訳 (福音館書店)

今から150年ほど前、ニューヨーク州北部の農場に、ワイルダー一家が住んでいました。4人きょうだいの末っ子アルマンゾは、学校に行くより農場の仕事がしたくてたまりません。馬が大好きなアルマンゾは、自分の子馬を持ち、子馬馴らしをすることを望みますが、お父さんは「子馬馴らしは大人の仕事」と言って子馬に近づくことも許してくれません。

畑で働ける年齢になったアルマンゾは、畑を耕し、種まきから脱穀まで、お父さんにひとつひとつ教わりながらやりとげます。家畜の世話や、子牛馴らしもできるようになったアルマンゾは、早く一人前になって、子馬馴らしをすることを夢に見ます。

自然と共に生きるワイルダー一家の1年を、9歳の少年の成長と共に描いています。遅霜で凍った何万本のトウモロコシの苗を救うため冷たい水をかけ続けたり、ミルクで育てた巨大なカボチャで一等賞をとったり、様々な出来事を主人公たちと共に体験できます。バタつきパンやソーセージ、アップルパイなど、お母さんの作る美味しそうな料理は印象的で、一家の満ち足りた日々や四季の喜びが伝わってきます。思いがけず子馬を持つ夢が叶う結末は感動的です。9歳くらいから。 (池之上)

8月	9月	8・9月の移動図書館 (いずれも木曜日です)				
9日	6日	塚森 地域内 10:30~10:50	沖代 地域内 11:00~ 11:20	福地(三反長) 地域内 14:30~14:50	米田 公会堂 15:00~15:20	竹広南 公民館 15:30~15:50
16日	13日			原池団地 公民館 15:00~15:20	山田 掲示板前 15:30~15:50	原 太田東地区農村 交流センター 16:00~16:30
23日	20日	広坂 公民館 10:30~10:50	上太田 公民館 11:00~ 11:20		太子 ニュータウン 公民館 15:30~15:50	吉福 公民館 16:00~16:30

お知らせ

「夏休みおはなしの夕べ」

日時：8月17日(金)

①4歳~大人 18:00~

②小学高学年~大人 18:30~

ろうそくの灯りのもと、昔話や詩、物語を楽しみます。

途中からは入れませんので、時間までにお越しください。

※8月の定例の絵本の時間・おはなしの時間はお休みです。

『ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』 帯木 蓬生 著

朝日新聞出版 254頁 2017年4月刊 1,300円 (請求記号) 493.7

本書は精神科医であり作家でもある著者が、新任医として悩める頃に出会い、その後支えにした能力「ネガティブ・ケイパビリティ」を紹介するものである。精神科医6年目、著者が精神医学の限界を感じていた頃、ある論文に出会った。それは精神科医にとって重要な「共感」に関するもので、引用されて当然のフッサルやフロイトと並んで言及されていたのは意外にも詩人のキーツとシェイクスピアだった。

論文には「共感を持った探索をするには、探求者が結論を棚上げする創造的な能力を持つていなければならぬ」とあり、その能力は詩人キーツがシェイクスピアを取り上げてネガティブ・ケイパビリティと表したもので「事実や理由をせつかに求めず、不確かさや不思議さ、懐疑の中にいられる能力」だとしている。

ところで著者によると、私たちの脳は何でも分かるうとするものらしく、脳が求めるのは積極的な問題解決能力、ポジティブ・ケイパビリティということになる。ところがこの能力では、えてして表層の「問題」のみをとらえて、深層にある本当の問題は浮上せず、取り逃がしてしまう危険がある。一方ネガティブ・ケイパビリティは物事をじっくり見詰め、すぐには解決できなくても持ちこたえていける。精神科医として働く著者はこのネガティブ・ケイパビリティに出会ってから、「踏ん張る力がついた。それほどこの能力は底力を持っている」と述べている。

医療の現場での問題、教育現場での問題にも言及している。特に教育についての言及「ヒトは生物として共感の土台には恵まれているものの、それを深く強いものにするためには不断の教育と努力が必要」という一文は重い。キーツ、シェイクスピア、そしてもうひとり取り上げてあった紫式部の作品を改めて読んでみようと思う。

(西村)

8月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	×	8	9	10	11
12	×	×	15	16	17	18
19	20	×	22	23	24	25
26	27	×	29	30	31	

9月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	×	5	6	7	8
9	10	×	12	13	14	15
16	17	×	×	20	21	22
23	24	×	×	27	28	29
30						

お知らせ

13歳からの読書会 『農場の少年』を読んで

- (R・イガ ル・ワルダ 作 福音館書店)
- 日時：8月12日(日) 10:30~12:00
  - 対象：中学生以上(要申込)
  - 準備：当日までに本を読んできてください。

ストーリーテリング 入門連続講座(全4回)

- 9月から12月の第1金曜日 10:00~12:00
- 講師：芦田悦子さん
- 対象：経験が概ね5年未満の方
- 申込みは図書館まで

地下水

7月6日から7日にかけて、西日本は記録的豪雨となり大きな被害に見舞われた。太子町は、6日に大雨警報が出され、役場では7日0時ごろ、各部署の半数が召集される2号配備体制がしかれた。図書館からは2人が登庁し、徹夜で、状況を知らせるファックスを災害対策本部に運んだり、土囊づくり、避難所開設準備にあたった。朝方には風雨もおさまり始め避難所の開設もなく、2号配備は解除された。図書館は通常どおり開館のため、2人は休みもせず図書館に姿を見せ、土曜日でにぎわう図書館の勤務をこなしていた。

太子町は幸い大きな被害もなく安堵したが、安栗、神戸、中国・四国では甚大な被害が発生し、被災された方々の喪失感、疲労感は想像に余りある。また、3週間後の現在も断水している地域もあり、真夏に風呂や炊事に水を使えることがどれほどありがたいかと改めて思った。

年々規模を増す水害や過酷になる夏の暑さは、地球温暖化が影響を与えているらしい。もう手遅れではないかと思いつつ、二酸化炭素を少しでも減らす暮らしをしようと、風呂の残り湯で洗濯し、弁当をつめている。(片木)

\*カレンダーの×印は休館日 \*□は館内整理日 返却のみ受付(10:00~17:00)  
\*開館時間は10:00~18:00 金曜日は20:00まで開館

